

大学在学時のボランティア経験が教員の職務遂行等に与える影響(1) —初任期教員に焦点をあてて

Research on the effect of volunteering as a university student while
working teacher faculty (1)
Focus on young beginning teachers

日 高 和 美

Kazumi HIDAKA
学校教育ユニット

生 田 淳 一

Junichi IKUTA
教育心理ユニット

谷 口 慎 二

Shinji TANIGUCHI
福岡教育大学
ボランティア・
コーディネーター

川 上 良 治

Yoshiharu KAWAKAMI
福岡教育大学
ボランティア・
コーディネーター

大 門 眞

Makoto OOKADO
福岡教育大学
ボランティア・
コーディネーター

(令和3年9月30日受付, 令和3年12月23日受理)

要 約

本研究は, 大学在学時のボランティア経験が教職に就いた際の職務遂行等に与える影響について明らかにすることを目的としている。本稿においては, 在学時多くのボランティアを行った初任期教員を対象にインタビュー調査を実施し, 教員育成指標の視点から分析を行った。

1. 課題設定

本研究は, 大学在学時のボランティア経験が教職に就いた際の職務遂行等に与える影響について明らかにすることを目的としている。

近年の教員養成政策において, 大学在学時に「ボランティア経験」を積むことは一貫して推奨されてきた。例えば, 2012(平成24)年に出された中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」において, 「学校ボランティアを含む「子どもと教育に関する幅広い体験」により, 教員になることの魅力やすばらしさとともに厳しさを感じさせる体験を積む。」ことの重要性や, 「学校ボランティアや学校支援地域本部, 児童館等での活動など, 教育実習以外にも一定期間学校現場等での体験機会の

充実を図る。その際, 特にいじめ・暴力行為・不登校等生徒指導上の諸課題への対応について理解を深める活動を重点的に行うことも考えられる。」ことなどが指摘されている。

2013(平成25)年に出された中教審答申「今後の青少年の体験活動の推進について」においても, 教員養成での取組として, 「教員養成段階において, 子どもたちが体験活動を行う際に, 学生が自ら企画を行ったり, 引率したりするボランティア等として参加できる機会を取り入れることで, 子どもの成長を実感したり, 予期せぬ子どもの行動も予見し対応したりするといった教員に必要な能力を身につけることができる。」と指摘されている。こうした動向を踏まえ, 教員養成系大学のみならず教員免許を発行する課程認定大学において

も、学校ボランティアが教育課程内外において広く推奨され、数多くの成果が報告されている。本学においても、2011（平成23）年度に、「ボランティアサポートシステム（VSS）」の運用開始し、その後も継続して組織体制の整備スタッフの強化、ボランティア活動推進のための基本方針の策定、表彰制度の実施、他県との連携などに取り組んでおり、その成果を検証している（生田他2021）。

また、2017（平成29）年の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」においては、円滑な入職のための取組の観点からも、大学在学時のボランティア経験は「採用の際のミスマッチを防止する取り組みとして、かつ教職に必要な最低限の実践力を身に付けさせることにも有効である」と指摘されている。また、同答申においては、教育委員会と大学が連携し共同で作成する「教員育成指標」の策定と見直しも含めた運用を行うことが指摘されている。

そこで、本研究は上記の点を踏まえ、教職キャリアの視点からボランティア経験の効果を検証することを通して、ボランティア経験の長期的な効果を把握する。また、これらを継続的に検証することを通して、本学におけるボランティア活動の更なる推進に役立てるとともに、養成期から入職後のキャリア段階における育成指標の見直しにも寄与できると考えている。なお、本学では、資料1（学生生活で身に付く教師としての実践力とボランティア活動）に示す通り、4年間の学生の活動を体系的に位置付け、ボランティア支援を行っている。これらの活動が入職後どのように寄与しているかも含めて検証していきたい。

本稿においては、研究の第一段階として初任期教員を対象に、①インタビュー調査を通して在学時におけるボランティア活動を振り返り、②ボランティア活動が養成期及び初任期にどのような影響を与えるかを明らかにしていきたい。調査対象としては、本学卒業生のうち在学時において特にボランティア経験を有している学生を設定しインタビュー調査を実施する。（日高・生田）

2. 方法・手続き・分析対象者

本学においては、大学が定める「学生ボランティア活動の推進に関する基本方針」の下、学生にボランティア活動を推進するとともに、具体的に学生のボランティア参加や支援を行うための窓口を学生支援課に設置し3名のボランティア・コーディネーターを配置している。

ネーターを配置している。

さらに、学生のボランティアへのモチベーションの向上やボランティア経験の見える化を図るためにボランティア経験時間に応じて表彰される「学生ボランティア活動認定表彰」を平成28年度から実施している（資料2参照）。

今回調査対象とするのは、上記認定表彰システムが実施されるようになった平成28年度に入学した学生である。

平成28年度入学の学生が卒業年度（令和元年）を迎えた際、認定基準に達した「リーダー認定者」は7名、「チーフ認定者」は14名、「サポーター認定者」は49名であった。

研究チームで調査対象者の選定を行い協議の結果、「ボランティアリーダー」に認定された学生を対象とすることとし、調査依頼を行った。

インタビュー調査の許諾が得られた者の中で、今回の調査・分析対象をA氏とした。A氏を選定した理由は、①ボランティアリーダーの中でも経験時数が多いこと、②多様ボランティア経験を継続的に実施していたこと、③ボランティア委員会のメンバーの中でリーダーとして活躍していたことの3点である。インタビュー調査は2021年9月25日、オンライン（Zoom使用）で行った。会話内容は、本人に許諾を得た上で録音を行っている。以下、A氏のフェイス・データとボランティアし履歴について述べる。

A氏は、教員歴1年6ヶ月の公立小学校教諭である。在学時にボランティアを始めたきっかけは、1年次に受講していた「ボランティア実践入門」の中で「学習支援ボランティア」を知ったこと、さらに、「4年後に教員になりたいが兄弟もいないため子どもとのかかわり方がわからなかったから知りたかった。学習内容、教え方を知りたかった。」からだと回答している。

A氏が在学時に経験している主なボランティア経験は以下の3つである。

第一に、学習支援ボランティアである。当該ボランティアは、1年生の5月から卒業まで継続している。具体的な活動としては、クラスに入って丸付けや授業補助であった。当初は子どもの対応や教え方もわからない状況だったが、地域の人達や先生からポイントを学んだと述べている。

第二に海外ボランティアである。A氏は実家でもホームステイを受け入れており関心があった。このボランティアに関わるきっかけは、家族に案内が来たことであった。ボランティアの内容としては、①日本に来た海外の子供と一緒に日本文化

（生活文化を含めて）を学ぶこと、②日本の子どもと共に海外に行ってキャンプやホームステイを通して日本文化を伝える活動である。①については、350人程度の海外の子が日本に入るプログラムである。このボランティアにA氏は1年生の夏から3年まで関わっている。

第三に福岡県教育委員会が主催するアンビシャス広場の企画・運営である。この活動は、1年次の9月から卒業まで関わっている。最初は地域にある学童放課後土日の遊びながら体験活動を行い、地域の方が主催しているレクリエーションに参加していたが、大学生を中心とするグループがあり、それに参加し自分たちでボランティア企画を行うようになった。このボランティアに参加したきっかけは先輩からの声掛けであった。このボランティアでは、防災クッキング、工作のテーマ等自然の家などでイベントを行っている。このボランティアでA氏は、地区の運営委員会の委員長

を経験している。

生田・谷口・松山・藤原（2021）では、学生ボランティアの経験についての記述について階層的クラスター分析を行い、「ボランティア経験のよさを知る経験」「コミュニケーションの大切さを知る経験」「一人一人への対応にふれる経験」「ボランティア活動の楽しさを感じる経験」「指導の難しさに気づく経験」「小学校の学級の様子にふれる経験」という8つのクラスターを見出している。調査対象となるA氏も「見る、経験する、教えてもらう、やってみる」という経験ができているといえる。（生田・日高・谷口）

3. 結果

インタビューで聞き取った内容から、大学在学時のボランティア経験が教員の職務遂行に生かされた事例を抽出した。そのうち、その事例を福岡県教員育成指標との対応表を作成した（表1～表

表1 福岡県教員育成指標（教職としての素養）と大学在学時のボランティア経験が教員の職務遂行に生かされた事例との対応

ステージ キーワード			養成 志・基盤	基礎・向上 基礎・基本	大学在学時のボランティア経験が教員の職務遂行に生かされた事例
			教員として、教育に対する志を高め、求められる資質・能力の基盤を形成する。	若年教員として、教育に関する基礎的・基本的な資質・能力を形成する。	
資質・能力 教職としての素養	教育公務員に求められる基本的な能力	法令遵守	法令を遵守することの重要性を理解できる。	不祥事防止に係る理解を深め、法令を遵守した教育活動を展開できる。	○個人情報、SNS に関する注意。ボランティアですでに様子の写真をぼかして掲載するなどの経験がある。 ○子どもとの関わる楽しさを実感したことがつながっている。
		事務処理	学校事務の内容について理解できる。	学級事務の正確・丁寧な処理ができる。	
	教育公務員としての使命感と責任	使命感と熱意	教育公務員の崇高な使命を理解し、志を立てることができる。	教育公務員としての自覚をもち、組織の一員として行動できる。	
教職の実践	連携・協働力	学校組織の理解と参画	学校組織や校務分掌とともに、学級担任の役割と職務内容を理解できる。	学校のエデュケーション・重点目標、学級経営及び教科経営の方針を理解し、実践できる。	○企画するときに細かく準備することができる。提案はしたことがないが、提案されたことについて管理する能力や子どもたちに伝えるときなど注意することができる。裏の動きが見えた。書類の提出期限も守ることができる。タイムマネジメントができる。 ○研修等にも、個人的には、参加できていないが、意欲は高い。 ○通信等で子どもたちの様子を積極的に伝えたりしている
		自己啓発・人材育成	研修や自己啓発により、教員としての資質を高めることの重要性を理解できる。	自己の役割を自覚し、教育活動にかかわるとともに、研修を通して教育に関する基礎・基本を身に付けることができる。	
		危機管理	危機管理の重要性及び危機を察知した際の組織的な行動の大切さを理解できる。	安全に配慮した教室環境等の整備と、危機を察知した際の迅速な対応ができる。	
		保護者、地域等との連携	ボランティア活動等を通じて、保護者や地域連携の重要性を理解できる。	保護者、地域と積極的に関わり、連携・協働した対応ができる。	

表2 福岡県教員育成指標（教職の実践：学習指導と評価の力）と大学在学時のボランティア経験が教員の職務遂行に生かされた事例との対応された事例との対応

“ステージ 職 キーワード”			養成 志・基盤	基礎・向上 基礎・基本	大学在学時のボランティア経験が教員の職務遂行に生かされた事例
			教員として、教育に対する志を高め、求められる資質・能力の基盤を形成する。	若年教員として、教育に関する基礎的・基本的な資質・能力を形成する。	
資質・能力					
教職の実践	学習指導と評価の力	授業構想	学習指導要領の理念と内容を理解するとともに、授業のイメージをもつことができる。	学習指導要領の理念と内容に基づき、教科書の内容に応じた指導計画を立案できる。	授業を企画するとき、子供たちの視点の向け方他のことをしている子供たちを注意しながら全体的な声掛けを行うことができた。
		授業展開	授業展開の基盤となる教育技術を理解できる。	基礎的・基本的な指導技術を身に付けた授業展開ができる。	
		授業評価と改善	学習評価の意義と方法について理解できる。	児童生徒一人一人の学習状況を把握し、適切な指導ができる。	

表3 福岡県教員育成指標（教職の実践：生徒指導と集団づくりの力）と大学在学時のボランティア経験が教員の職務遂行に生かされた事例との対応

“ステージ 職 キーワード”			養成 志・基盤	基礎・向上 基礎・基本	大学在学時のボランティア経験が教員の職務遂行に生かされた事例
			教員として、教育に対する志を高め、求められる資質・能力の基盤を形成する。	若年教員として、教育に関する基礎的・基本的な資質・能力を形成する。	
資質・能力					
教職の実践	生徒指導と集団づくりの力	児童生徒理解	児童生徒理解と指導の意義・重要性を理解できる。	学級の児童生徒を取り巻く環境や発達の状況を理解し、児童生徒一人一人を支援することができる。	○子供たちの話を聞くときに変化を読み取ることを気にかけている。1年目は、いっぱいいっぱいだった（学級には35名程度の児童）2年目は、ゆとりができて聞き取るようになった。
		指導・支援	個や集団に対する指導の基盤となる指導技術を理解できる。	保護者や校内組織と連携して、個に応じた指導ができる。	

表4 福岡県教員育成指標（教職の実践：連携・協働力）と大学在学時のボランティア経験が教員の職務遂行に生かされた事例との対応

“ステージ 職 キーワード”			養成 志・基盤	基礎・向上 基礎・基本	大学在学時のボランティア経験が教員の職務遂行に生かされた事例
			教員として、教育に対する志を高め、求められる資質・能力の基盤を形成する。	若年教員として、教育に関する基礎的・基本的な資質・能力を形成する。	
資質・能力					
教職の実践	連携・協働力	学校組織の理解と参画	学校組織や校務分掌とともに、学級担任の役割と職務内容を理解できる。	学校の教育目標・重点目標、学級経営及び教科経営の方針を理解し、実践できる。	○企画するとき細かく準備することができる。提案はしたことがないが、提案されたことについて管理する能力や子どもたちに伝えるときなどに注意することができる。裏の動きが見えた。書類の提出期限も守ることができる。タイムマネジメントができる。○研修等にも、個人的には、参加できていないが、意欲は高い。○通信等で子どもたちの様子を積極的に伝えたりしている
		自己啓発・人材育成	研修や自己啓発により、教員としての資質を高めることの重要性を理解できる。	自己の役割を自覚し、教育活動にかかわるとともに、研修を通して教育に関する基礎・基本を身に付けることができる。	
		危機管理	危機管理の重要性及び危機を察知した際の組織的な行動の大切さを理解できる。	安全に配慮した教室環境等の整備と、危機を察知した際の迅速な対応ができる。	
		保護者、地域等との連携	ボランティア活動等を通じて、保護者や地域連携の重要性を理解できる。	保護者、地域と積極的に関わり、連携・協働した対応ができる。	

4に示す)。ボランティア経験が活かされることで、教員の教諭としての職務遂行のステージは、基礎・向上ステージに到達していることがうかがえる。

インタビューで聞き取った内容を整理すると「ボランティア経験において、教師から学び、実際に児童に教える経験ができたことが大きく、そのことがいまに役立っている」と考えていることがわかる。授業づくりでは、ボランティア経験で授業をたくさん見ることができたことで、学校の取り組みや授業づくりにおいて同僚教師が何を考えているのか理解することができるといったことや、授業づくりの視点の幅が広がったことを実感している。授業スキルにおいても、視線の移し方(全体の指導、個の指導での視線の向け方)など、ボランティア先の教師の行動をモデルに自身の教授活動につなげることができている。学級経営では、子供たちへの具体的な取り組みを計画することができる。たとえば、レクリエーション、集会、学活などでミニゲームなどを実施することができる。顔色みながら会話をし、言葉がけを工夫するなど、子供の様子を気にかけることができる(ボランティア先で見聞きしたことが役立っている)。つまり、見る、経験する、教えてもらう、やってみる、というボランティア経験が、現在の教員としての職務遂行につながっている。

初任のときには、発揮できなかったけど、2年目は発揮できているなど、ボランティア経験は、今後の教職生活にも生きてくる可能性がある。まだ、行事を提案するなどの機会がないため発揮できていないマネジメントスキルについても、ボランティアで企画・運営の経験があることで、提案されたことに対してイメージできるので、タイムマネジメントの意識も高く、段取りがわかるので先手を打って保護者対応や児童への指導ができるなどの職務遂行が可能になっている。(生田・日高)

4. 考察・課題と展望

本稿においては在学時にボランティア経験が豊富であった教員初任期の卒業生を対象にインタビュー調査を行った。教員育成指標の視点から調査結果を分析した際、以下の点が指摘できる。

第一に、在学時のボランティア経験は、様々な場面において入職後の職務遂行に生かされていたことが明らかになった点である。特に生かされた事例として、①学習指導と評価の力、②生徒指導と集団作りの力、③教員としての素養(教育公務員に求められる基礎的な能力、使命と責任などが

挙げられる。

特に、学習指導については、学習支援ボランティアにおいて教諭の指導技術や子どもに対するまなざし、児童の様子に合わせて臨機応変に対応する力などが見についたと述べていた。また、生徒指導については、ボランティアで学んだ対話をベースに児童の変化を読み取ることなどについても2年目から意識できるようになったと述べている。

組織運営等に関わる経験については、経験が浅いため実践を行う機会が現時点でなかった連携協力(学校組織の理解と参画、危機管理等)の内容についても、ボランティアで委員長等マネジメントを行った経験から、管理職やリーダーから提案・指示されたことを子どもの教育活動につなげる視点や、タイムマネジメントの視点を持って職務を遂行していることが明らかになった。

第二に、養成期におけるボランティア経験の有効性を再確認できた点である。

大学の講義科目において理論や技術については学ぶことはできるが、A氏は多様なボランティアを継続的に経験したことで、理論と実践の往還しながら養成期を過ごしている。養成期の教員指標と照らした際、ボランティアの実践において経験し、補完できた内容についての言及が多くみられた。また、ボランティア実践については様々な課題や困難もあったと振り返っているが、その際ボランティア・コーディネーターに相談しながら解決に導くことができたとの発言も見られた。今後ボランティア活動を一層推進していくためにサポート体制の充実が重要となることも指摘しておきたい。

本稿で指摘した上記の結果については、A氏の経験という一事例から導き出したものであり、一般化には多くの課題が残る。今後、研究面においては本稿の結果を踏まえて分析枠組みを再構築し、調査対象者の拡大や継続的に調査・分析を行うことで、研究目的の達成に近づけていく。また、実務の面でもこの調査結果を生かした教育活動、サポート体制の見直し・改善を行っていきたい。

(日高・生田・谷口・川上・大門)

引用文献

生田淳一・谷口慎二・松山時春・藤原富男(2021) 学生はボランティア活動でどのような経験をしているのか—福岡教育大学のボランティア支援の取り組み— 福岡教育大学紀要, 第70号, 第6分冊, pp.59-65

学年	活動と内容	1 年	2 年	3 年	4 年
○フレッシュアップセミナー (前期実施) ○ボランティア実践入門講座受講 (前・後期・体験型講座) ○在校生オリエンテーション (次年度以降の学生ボランティア活動の計画に役立て実践する)	学生ボランティア活動の目的を理解し、VSSへ登録を完了する。授業の空き時間やサークル活動等を活用して夏休み前までにボランティア活動を一度体験して報告書を作成し夏休み以降のボランティア活動計画を立てる。 特に夏季休業中には、自己の興味関心を優先したり友達と相談したりしながら学校・地域・公共機関・福祉関係へ短期集中型ボランティア活動(母校が効果的)を体験する。(困ったら学生支援課7番窓口相談に行く)	在校生オリエンテーションを受け、1年次の学生ボランティア活動の幅を広げボランティア活動の体験の質を高める。特に、基礎実習が充実した体験になるように、2年次の活動計画を立てる。体験の中で教職として素養・実践のための習得内容について自己評価し、質を高めるように、大学の授業・ボランティア活動・日常の生活習慣をつないで自覚ある大学生生活を送れるように努力する。 (困ったら学生支援課7番窓口相談に行く)	在校生オリエンテーションを受け、2年次の学生ボランティア活動を振り返り、児童生徒と授業作りが一体となるように学習支援補助の質を高める。特に、本実習が充実した体験になり、3年次のボランティア活動により教職への意欲が高まるように、大学の授業・ボランティア活動・日常の生活習慣をつないで自覚ある大学生生活を送れるように努力する。 (困ったら学生支援課7番窓口相談に行く)	在校生オリエンテーションを受け、3年次の学生ボランティア活動を振り返り、将来の教育現場を予想した準備を繰り返す。特に、総合的な教育実践力を高める。特に、教育総合インターンシップ実習が充実した体験になり、安心して職場に適応できるように、学校を支えるマネージメント力を意識して残りの学生生活を送る。 (困ったら学生支援課7番窓口相談に行く) ※卒業までに学生ボランティア活動体験100%を達成する。	
教育実習につなぐ・生かす	9月に実施される体験実習の前後に学習支援ボランティア活動を体験する。(教師の一日を観察したり授業等の参観により教師の使命感と熱意を発見理解し、担任の学習支援補助を体験する。体験実習校でつなぐと効果的)	11月に実施される基礎実習の前後に学習支援ボランティア活動を体験する。(事前の研修である教材研究・授業参観の在り方・学習指導案の作成・模擬授業の体験が生きた体験【ボランティア先の研究授業参観・反省会への参加をすると効果的】)	9月～10月に実施される本実習の前後に学習支援ボランティア活動を体験する。(実習で扱う教科・教材に出会った教職の準備を開始したり本実習を見学したりできる学習支援実習の一部をすすめる。学習指導要領解説書や教科書を熟読する。)より一層教職に就きたいという自覚を高める。	9月～12月に実施される教育総合インターンシップ実習の前後に学習支援ボランティア活動を体験する。特に採用前に体験すると効果的。(学校現場で継続的に子どもや教員と生活をともにしながら、教育現場の日常を幅広く体験でき、総合的な教育実践力を高めることができ、安心して職場に適応できます。	
採用試験につなぐ・生かす	就職としての素養・実践のための習得内容をチェック(社会人に求められる基礎能力・教育公務員の使命感と熱意・学習指導と評価の力・児童生徒指導と集団づくり・学校を支えるマネジメント力)	原書(自己アピール)・個人面接・集団面接・模擬授業・論文・実技への日常化 法令遵守・事務処理能力・使命感と熱意・授業展開力・授業評価と改善 ・児童生徒理解・児童生徒指導・学校組織の理解と運営・人材育成・危機管理・保護者地域との連携			
発見・発信・改善・自立の繰り返し	発見	発見	発見	改善	自立
私の学生ボランティア活動の記録 (採用試験願書等に役立つ)	○学校関係 ○公共機関(地域) ○福祉関係 ○大学 ○サークル等	報告書の保管と整理(延べ時間と延べ日数の記録・自己成長の振り返り・発信・改善・自立) ※(VSS・ボランティアサポートシステム上の個人カルテ報告書の活用)			
ボランティア認定制度の活用	学校(保幼小中高・特別支援学校) + 地域・公共機関・福祉関係の2つの活動を体験し、サポーター認定100時間を目指す。	サポーター認定に関わる条件である他校種(保幼小・小・保幼小・中・小・中・等)・地域等への活動を体験し、チームで200時間を目指す。	サポーター認定に関わる条件である他校種(保幼小・小・保幼小・中・小・中・等)・地域等への活動を体験し、チームで300時間を目指す。	サポーター認定に関わる条件である他校種(保幼小・小・保幼小・中・小・中・等)・地域・大学等での企画運営)。	サポーター認定に関わる条件である他校種(保幼小・小・保幼小・中・小・中・等)・地域・大学等での企画運営)。

資料1 学生生活で身に付く教師としての実践力とボランティア活動

1 学生ボランティア活動認定システムについて



福岡教育大学では、学生ボランティア活動を教育の一環として位置づけ、社会貢献するとともに学生が、日常の学校を経験することで、教師としての資質や教育実践力を身につけることをめざしています。

福岡教育大学 **COC 事業**の中で学生ボランティア活動認定システムを導入し、ボランティア活動に対する学生の自己評価や受け入れ先（学校）の他者評価をもとに学生自らがボランティア活動を通して身につけた資質能力を把握し、自分の成長を意識し、これから先、さらに、自らを高めるため、めざす目標となる評価（認定システム）を導入して取り組んでいきます。**※COC事業**（地域再生の核となる大学づくり **Center of Community**）

【対象学生】対象は、本学に在籍している学生（希望者）です。

【実施年度】平成28年度から福岡全県下で、令和元年度からは九州各県でも実施しています。

2 学生ボランティア活動認定システムで身につけてほしい資質能力

学校支援ボランティア活動により、学生は日常の学校の教育活動を経験し、認定評価を通して、教師としての実践的指導力につながる資質能力としての「主体性」「協調性」「創造性」「調整力」「企画力」「ストレスコントロール力」等を効果的に身につけることができるようにしていきます。

3 学生ボランティア活動認定評価の在り方について

学校支援ボランティアを受け入れ、学生の要望に応じて認定評価（受け入れ先の他者評価）をしていただける場合は、認定評価のねらいが達成できるように、次の内容についてご確認やご配慮をお願いします。

（１）学生ボランティア活動における3つの段階と資質能力の高まり

大学生生活の中で様々なボランティア活動を通して学生は、第1段階「サポーター」第2段階「チーフ」第3段階「リーダー」の3段階をめざして活動します。

評価項目は、次の4つの項目「地域社会への働きかけや貢献」「対人関係の能力」「ストレスコントロール力」「自尊感情・自信」です。次ページの図は、「地域社会への働きかけや貢献」における学生の資質能力の高まりを示した例です。

評価の観点	サポーター	チーフ	リーダー
ねらう力	地域社会への関心や愛着	地域理解・地域課題のアプローチ	地域愛・地域創造
評価1 協力度	学校や地域社会のボランティア活動に主体的に参加することができる。	学校や地域社会のボランティア活動のよさや課題を理解しようとする。	学校や地域社会、大学のボランティア活動の運営や企画に参加・協力できる。
評価尺度	4 3 2 1 N	4 3 2 1 N	4 3 2 1 N
活動延べ時間	100時間	200時間	300時間

上記活動延べ時間は、過年度に渡って累計した時間です。その内容は、次のとおりです。

- ・ サポーター 100時間は、1つの学校のボランティア活動時間または、異校種でのボランティア活動の時間を合計したもので学校支援ボランティア活動が中心となります。
- ・ チーフ 200時間は、異校種のボランティア活動に加えて様々な地域での学校ボランティア活動の時間を合計したものです。
- ・ リーダー 300時間は、様々な地域での学校支援ボランティア活動及び地域の団体等でボランティア活動した地域支援ボランティア活動の時間を合計したものです。

